



イースターカクタス

聖書には詩編、箴言、コヘルトの言葉、雅歌、哀歌など、詩や歌としてまとめられた文学の世界が展開されています。詩編は 150 編もある大部の書です。聖書の民がどんなに詩を愛したかが分かります。

心の奥底に沈んでいる思い、うごめいている感情、また、発露させたい衝動、欲求、求めてやまない希望、祈り、生きる力になっている愛、感謝などを自由に、また、音やリズムや韻を伴って、比喩や隠喩の言葉を豊かに用いて、情感を表現できるのが詩や歌です。自分の感情、感覚、感性に呼応してくれます。

冒頭を飾る 1 編は「詠み人知らず」ですが、「いかに幸いなことか」と、歌い始めています。

いかに幸いなことか／神に逆らう者の討らいに従って歩まず／罪ある者の道にとどまらず／傲慢な者と共に座らず／主の教えを愛し／その教えを昼も夜も口ずさむ人。

その人は流れのほとりに植えられた木。ときが巡り来れば実を結び／葉もしおれることがない。その人のすることはすべて、繁栄をもたらす。(1:1) 2 編の最後にも

いかに幸いなことか／主を避けどころとする人はすべて(2:12)とまとめられていますので、1 編、2 編をセットにして歌いたいです。主イエスの「山上の説教」(マタイ5:3)を思い起させます。「流れのほとりに植えられた木」で真っ先に思い起こすのはヨセフです。

ヨセフは実を結ぶ若木／泉のほとりの実を結ぶ若木。(創世記 49:22)

ヨセフはヤコブがやっと授かった愛するラケルの子、夢見る人、兄弟のために若くしてエジプトに奴隷として売られた人、無垢でファラオに真面目に仕えた人、悪を働いた兄弟を赦す人、もてるものを家族に分け与えた愛の人。ヨセフの生涯と私の母の生涯は似ています。母を「女ヨセフ」と呼んでいました。母は神の教えを愛し、昼も夜もその教えを口ずさむ、忍耐強く、素直な人でした。

それと共にこの詩編は「神に逆らう者」への憐憫も歌われています。彼らの筆頭が地上の王、支配者ですから、この詩編は王への言葉でもあるでしょう。神はすでに聖なる山シオンで／わたしは自ら、王を即位させた(2:6)と、王の王である方を示し、それに従えと諭します。そしてお前はわたしの子／今日、わたしはお前を生んだ(2:7)と、詩人を神の子として認め、祝福します。



1 編は「讃美歌 21」の113「いかに幸いな人」です。この曲は 16 世紀に宗教改革が始まり、一般の信徒が聖書を読み、讃美歌を歌うようになった頃、フランスのクロード・グディメル (Claude Goudimel 1510-1572・左)により作られた「ジュネーブ詩編歌」から取り入れられています。穏やかで、静かな美しい曲想です。

参照 <https://www.youtube.com/watch?v=ulxmGx57CSA>

2 編は「讃美歌 21」の114「民よ、主に仕えよ」です。20 世紀の作品です。司式者が詩人となって歌い、その声に支配者、王、神と、役割を分担して各節を朗誦する劇的表現の答唱で歌います。285「高き山の上」も朗々と神の子主イエスをたたえています。15 世紀のラテン語聖歌に無名の讃美歌集の合唱曲を組み合わせ、見事に賛美しています。

参照 <https://play.hymnswithoutwords.com/category/hymnal/grenoble-antiphoner-1753/>

「讃美歌21」の 580 曲の内、詩編そのものを歌った讃美歌が59曲、語句を取り入れた讃美歌が 372 曲もありますので、私たちは詩編を口ずさむことが多いのです。なんと幸いな私たちでしょう。